episode 42　目を閉じれば、明るく華やかな時間が続く

『もりのなか』
マリー・ホール・エッツ 作
まさきるりこ 訳
福音館書店　1963年

投稿者　佐々木優子 さま（千葉県）

リビングの本棚にあるモノクロの絵本、エッツの『もりのなか』と、春色のお菓子の紙箱。
これらは、私と彼女を繋ぐもの。
高校の同級生だった彼女とは、結婚してお互いに子どもができて、近くに住んでからの方がより親しくなれた。
子ども達も随分大きくなったある日、彼女が私に絵本を贈ってくれた。初めて手にするモノクロの絵本だった。
「ゆうちゃん、これ、いいよ」 あまり多くは説明せず、笑顔を添えて渡してくれた。

森の奥に入った男の子の後ろを、たくさんの動物がついてきて行進して、やがていなくなった頃に
お父さんが男の子を迎えに来る。
自分では、色彩や絵の可愛さばかりで選んでいた絵本。
新しい出会いに心をとらわれ、ことあるごとにページをめくった。その、静かに始まる心踊る世界に浸った。

本棚のカラフルな菓子箱は、それから二十年後に突然、旅立ってしまった彼女の告別式で受け取ったもの。
斎場には、学生時代や子育て時代の、たくさんの彼女の写真が飾られていた。
旦那さんのお別れの言葉が、彼女との馴れ初めで始まり、好きになった時の思いが溢れていて、
なんだか自分の涙がしょっぱいだけじゃなくなった。
高校時代は、ボブっぽいサラサラの髪にメガネ。決して派手な人ではなかったが、
遺影は、ハワイで撮った写真らしい陽光に負けじと、輝くような美しい笑顔だった。

今も繰り返し手に取る、彼女からの色のない絵本。頭の中では、動物たちが奏でる音や、
森いっぱいにこだまするみんなの歌声が、カラフルな音符になって浮遊する。

もっと彼女と話して過ごせたはずの時間がピタリと止まり、モノクロームになってしまったけど、
目を閉じれば、明るく華やかに賑やかに、彼女との時間は続いていく。
子ども会の活動に誘ってくれて、母子七人で遊んだ時もあったね。うちの子も、貴女とこの絵本が好きだよ。
私は、彼女になんとたくさんのプレゼントをもらったことだろう。
私は、私は何かを渡せたのかな。そう問いかけながら、また、もりのなかに出かけてみるよ。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2024」投稿作品より

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。
さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本をある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。

アメリカの絵本黄金時代を築いた作家

アメリカの絵本黄金時代を築いた絵本作家のひとりは、1935年に『ペニーさん』でデビューしたマリー・ホール・エッツ氏です。ワンダ・ガァグ氏の『100まんびきのねこ』(1928) が端緒となり、アメリカ独自の絵本芸術が開花したのです。これに続いたのが、バージニア・リー・バートン氏とエッツ氏でした。そして、1950年代までのアメリカ絵本百花繚乱のただ中1944年に、『In the Forest』(もりのなか) は出版されました。

日本でも、エッツ氏の『わたしとあそんで』や『赤ちゃんのはなし』は、時代を超えて読み継がれている名作です。

深い悲しみに立ち向かえたデッサン

1895年米ウィスコンシン州生まれのマリー・ホール・エッツ氏は、1985年に90歳で他界するまで、数多くの絵本を創作しました。

『もりのなか』は、エッツ50歳の作品です。40代前半のとき、末期がんの夫を看病するために、シカゴ郊外の森の中に夫婦２人で暮らしました。医師であったハロルド・エッツ博士の最期の日々を看病しながら、そのあい間で自分を慰めるために、『もりのなか』の絵を一枚一枚丁寧に描いたのです。それは、夫と２人で、公園など戸外で過ごした経験から生まれたものでした。

夫が亡くなると、エッツ氏はシカゴを離れてニューヨークに出ました。そこで、メイ・マッシーという伝説的な編集者のもと、『もりのなか』は、エッツ３冊目の絵本として出版されたのです。この小さな絵本のおかげで、エッツは深い悲しみに立ち向かうことができたと述べています。

モノクロの力をいま

表紙と裏表紙に使われた茶色以外、本文の全ページにわたりモノクロが広がる『もりのなか』の世界へ、能動的に入り込んで真の意味で没頭できるのは、小さな子どもだけの特権です。

子どもが絵本の世界に没入することを、最初に深く論じたヴァルター・ベンヤミンは、印刷技術が未熟な時代に、絵本の絵に制限が多かったことによる効果について、次のように論じています。

「子どもの想像は、色つきの銅板画を眺めているときには、夢見心地で自分自身の中に沈潜していくが、白黒の場合には、絵は冷静な散文となって子どもを外の世界に誘い出す。白黒の絵は、記述を無理強いするような力を秘めていて、子どもの心のなかに言葉を呼び覚ますのである。」

すなわち、彩色された絵の場合、絵の方から子どもに向けて働いていくけれど、白黒の場合、付け加える余白が存分に残されているため、子ども自身がお話の世界を色付けし創造すると示唆したのです。つまりは、現実と空想の境目を知ってしまった大人には、遥かに及ばない「想像」の世界に、子どもは没入するというわけです。

人間らしい生き方を示した絵本作家

エッツ氏は最初の夫を新婚生活の直後に戦争で失い、自身も予防接種のミスから生涯にわたり健康を奪われました。そのため、一度離れた絵の仕事へ戻るのです。シカゴに戻って、大学医学部のハロルド・エッツ教授と結婚した後、『ペニーさん』を描き上げました。のち、シカゴで開かれた「人間の世紀展」で、エッツ博士の勤務する大学が「ヒトの胎芽」を展示したとき、エッツも奉仕活動に当たるのです。これがきっかけで、科学絵本『赤ちゃんのはなし』を５年間かけて制作しますが、その５年後に夫がなくなりました。自然と共生することが最も人間らしい生き方と示した絵本作家が、マリー・ホール・エッツなのです。

文献
1）松居 直：絵本編集者の眼－エッツ『もりのなか』を読む，かわさき市民アカデミー出版部，神奈川，73p，2003.
2）ヴァルター・ベンヤミン著，丘澤静也 訳：教育としての遊び，晶文社，東京，p.26，1981.